

No. 112 2011/ 9/ 24

編集・発行 化石研究会事務局
〒525-0001

滋賀県草津市下物町 1091 番地
滋賀県立琵琶湖博物館地学研究室

第136回例会のご案内

第135回例会を大阪市立自然史博物館で行います。今回は、博物館で開催されている特別展「OCEAN! 海はモンスターでいっぱい」と関連して、クビナガリュウとカメの化石研究の最前線を紹介していただきます。また、例会に参加された方は、博物館の常設展と特別展の観覧もできます。多くの皆様の参加をお待ちしております。

■ 日時：2011年10月29日（土）13：00～17：00

■ 会場：大阪市立自然史博物館 講堂（地図参照）

大阪市東住吉区长居公園 1-23 電話：06-6697-6221（代表）

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp>

■ 内容

・テーマ：恐竜時代の海のモンスター

＊今回は、博物館の公開講演会として行なわれます。

・プログラム

13:00～13:10 開会挨拶・趣旨説明

13:10～14:10 「クビナガリュウのいた時代」佐藤たまき氏（東京学芸大学）

14:10～15:10 「ウミガメ：大絶滅を生き延びたモンスター」平山 廉氏
（早稲田大学）

15:10～15:40 講師の対談・会場からの質問

15:40～17:00 自然史博物館見学

（本館常設展示、特別展「OCEAN! 海はモンスターでいっぱい」）

講演要旨

●「クビナガリュウのいた時代」佐藤たまき氏（東京学芸大学）

クビナガリュウは、陸で恐竜が大繁栄していた時代に海で生息していた爬虫類であり、その化石は日本を含む世界の様々な地域の地層から見つかっている。この 20 年程の間に新標本の発見や既知の標本の再検討などを通して新知見が得られた一方で、系統（進化の道筋）に関しては専門家の見解が分かれるなど、依然謎の多い生物である。本講演では、クビナガリュウに関する最近の研究を紹介し、彼らの暮らしていた時代についての理解を深めることを目的としたい。

●「ウミガメ：大絶滅を生き延びたモンスター」平山 廉氏 （早稲田大学国際教養学部）

ウミガメ類は、白亜紀中頃（約 1 億 1000 万年前）に出現した後、全長 4メートルに達したアルケロンなど史上最大のカメ類に進化した。カメ類は白亜紀末に生じた大量絶滅にもほとんど影響を受けなかった。新生代に入るとオサガメの仲間が深海に潜水する特異な生態を発達させた。ウミガメたちの知られざるモンスターぶりを紹介する。

■化石研究会会員の博物館への入館について<<重要>>

- ・化石研究会会員は、4 ページの博物館通用口から自然史博物館へ入館してください（非会員の同伴者は、一般入口からの入館になります）。
- ・博物館館講堂前での受付は 12 時から行います。博物館通用口で「化石研究会会員です」と言って入館し、講堂前へお越しください。
- ・午前 9 時 30 分から、自然史博物館の常設展、特別展を見学することもできますので、早目に来て、じっくり見学してください。午前中から見学する場合は、博物館通用口で塚腰さん呼び出し、入館券をお受け取りください。

■懇親会

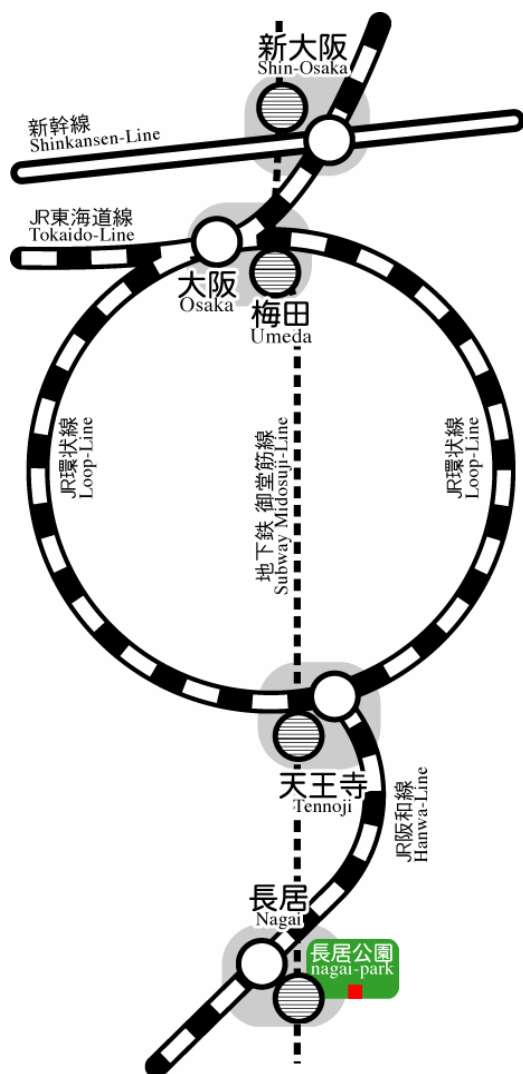
17 時 30 分から長居駅付近で懇親会を開催します。参加希望の方は、大阪市立自然史博物館の塚腰さん（連絡先下記）あてに、10 月 22 日までにご連絡ください。

〈懇親会申込先〉 E-mail: mtsuka@mus-nh.city.osaka.jp
(メールのタイトルは「化石研究会懇親会申込み」としてください)
TEL: 06-6697-6222 FAX: 06-6697-6225 (博物館)

■ 運営委員会

運営委員会は10月29日午前10時30分より自然史博物館会議室で行います。
運営委員、事務局員など役員の皆さまはご出席ください。

■ 交通アクセス



- 地下鉄御堂筋線「長居」駅南改札口3号出口から東へ約800m
 - JR阪和線「長居」駅東出口から東へ約1km
 - 近鉄南大阪線「矢田」駅西へ約1.8km
- * 詳細は、大阪市立自然史博物館のホームページをご覧ください。



第 135 回例会準備委員：塚腰 実、石井久夫、樽野博幸

~~~~~

## 第 29 回総会・学術大会報告

第 29 回総会・学術大会が、6 月 4 日（土）、5 日（日）に京都教育大学の共通講義棟 F 棟で開催されました。参加者は、41 名でした。1 日目は、山川千代美（琵琶湖博物館）、松本みどり（千葉大学）両氏の企画で、特別講演会「植物化石研究と植物系統学の進展」が開催されました。講演者は、西田治文（中央大）、戸部 博（京都大）、楡井 尊（埼玉県立自然の博物館）の 3 方で、

現生と化石の最前線の植物研究の話をお聞かせいただきました。西田氏からは、高分解能のSEM（走査型電子顕微鏡）を利用した Mesofossils の研究や鉍化石の切断面による内部構造の研究成果について、戸部氏からは、アンボレラ (*Amborella trichopoda*) という種を取り上げて、裸子植物と被子植物の間の失われた鎖（ミッシング・リンク）を探して発見した最近の研究成果を紹介していただきました。これらの中で、近年の分子情報に成果に基づいて、科の統廃合が進んだ結果、分類体系がかなり変わってしまったという話には驚かされました。楡井氏からは、古花粉学から見た植物系統学と花粉形態研究の課題についての講演がありましたが、意外と花粉の形態が十分に調べられていないという現実にも驚かされました。いずれにしても、普段まとまって聞く機会の少ない植物関連の話題をお聞くことができ、充実した講演会となりました。

翌日には、会員による一般講演 9 題とポスター発表 2 題が行われ、内容の濃い総会・学術大会となりました。 (事務局)



特別講演会のようす



**間島信男のお勧め本の紹介**

(カッコ内の日付は発行日)

お薦め度ランク (ランク付けは間島による) : ★・・持っているも損はない. ★★・・標準 ★★★・・特にお薦め

<一般書>

1) 『EVOLUTION—生命の進化史—』ダグラス・パーマー [著], ピーター・バレット [画], 椿 正春 [訳], 北村雄一 [監修] ソフトバンク・クリエイティブ, 367p. (2010年1月) ¥4,700円+税.

**1) 『乾燥標本収蔵1号室—大英自然史博物館迷宮への招待』リチャード・フォーティ [著] 渡辺政隆・野中香方子 [訳] NHK 出版, 451+10p. (2011年4月) ¥2,500円+税.**

『三葉虫の謎』『生命 40 億年全史』『地球 46 億年全史』で有名な著者が、1970 年から 2006 年まで奉職した大英自然史博物館の舞台裏を赤裸々(?)につづった読みものである。標本にまつわるエピソードや奇人変人研究者のオンパレードである。25 歳で採用されてから 1 編の論文も書かなかったベレムナイトの専門家というのも登場する。自然史博物館とは、そもそもどのようなところかという本質論も随所に盛られている。と同時に、700 万点もの所蔵をほこる天下の大英自然史博物館にしてこの程度の扱いしか受けないのかという、自然史博物館を取り巻く状況の非常な厳しさに思わずぞっとする箇所もある。自然史学や博物館に興味がある人にはぜひ読んでもらいたい一冊である。 (★★)

**2) 『アナザー人類興亡史—人間になれずに消滅した“傍系人類”の系譜—』金子隆一 [著] 技術評論社, 269p. (2011年5月) ¥1,580円+税.**

ホモ・サピエンス以外の人類について、その発見や特徴、研究史などを恐竜本で有名なサイエンス・ライターが微に入り細をうがって解説している。説明を詳細にするためには専門用語の使用も辞さないという筆致は相変わらずである。最近多くの化石人類の新種が提唱され、研究内容も進歩著しい分野であるだけに最新の研究成果をレビューしたこのような解説本は重宝である。化石研ニュース No.110 で紹介した『ヒトの進化七〇〇万年史』(河合信和著, ちくま新書) とあわせて読むと人類進化の概要について今日的な知識が得られると思う。 (★★)

**3) 『恐竜の世界へ。ここまでわかった! 恐竜研究の最前線』真鍋真 [監修] ペン編集部 [編] 阪急コミュニケーションズ, Pen books, 139p. (2011年7月) ¥1,600円+税.**

前半は、羽毛恐竜の色の復元、ティラノサウルスの軟組織の発見、角竜のフリル、南米での恐竜発掘など、恐竜研究の最新の話題について紹介し、後半は現在活躍中の恐竜研究者、サイエンス・イラストレーターや恐竜の見られる世界の主要博物館などの紹介となっており、コンパクトにまとまっている。通勤・通学途中で読んで、最近の研究成果について知るといにはよい本である。 (★★)

**4) 『ぼくは上陸している—進化をめぐる旅の始まりの終わり』スティーヴン・ジェイ・グールド [著] 渡辺政隆 [訳] 早川書房, 上巻 238p. (2011年8月) ¥2,500円+税, 下巻 344p. (2011年8月) ¥2,500円+税.**

皆さんよくご存知の進化生物学者にして卓抜した科学エッセイストであったジェイ・グールドの最新にして最後のエッセイ集。グールドは『ナチュラル・ヒストリー』誌に 2001

年1月まで通産300回にわたってエッセイを連載していたが、それらは『ダーウィン以来』から始まって本書まで10冊のエッセイ集にまとめられてきた。原著出版の2002年にグールドは闘病むなしく帰らぬ人となってしまったため、本書は一連のエッセイ集の最終巻であると同時に遺作ともなった。一見、奇妙な些事を取り上げながら一般的なテーマを説明するというグールドのエッセイスタイルは不変である。表題の『ぼくは上陸している』はグールドのきわめて個人的な思い出にもとづくもので、その内容は本書を読んでものお楽しみとしよう。表紙を見て、脊椎動物の上陸にまつわる内容と早とちりしないように、一言ご注意申し上げておく（私がまさにそうだった）。 (★★)

### <専門書>

**5) 『過去を復元するー最節約原理, 進化論, 推論』 エリオット・ソーバー [著] 三中信宏 [訳] 勁草書房, 332p. (2010年4月) ¥5,000円+税.**

本書は1996年に蒼樹書房より出版され、長らく入手困難となっていたが、新しく訳者解説が追加されて復刊された。分岐学による系統推定で判断基準として用いられる最節約法の妥当性について論考している。系統推定における手法ではなく、哲学的側面を追求した本書は日本語で読める数少ない本格的な生物哲学書である。それだけに本書は難解であり、数式の頻出する本書を読みこなすには、かなりの数学的素養が必要とされる。しかし、系統復元の原理を書いた本では、よく引用される文献なので理解は難しくとも一度眼を通しておくのも無駄ではないだろう。 (★★)

**6) 『野と原の環境史』 シリーズ日本列島の三万五千年ー人と自然の環境史第2巻. 湯本貴和 [編] 佐藤宏之・飯沼賢司 [責任編集] 文一総合出版, 333p. (2011年3月) ¥4,000円+税.**

総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「日本列島における人間ー自然相互関係の歴史的・文化的検討」のまとめとして、各研究分担者の成果をまとめたものである。日本列島およびその周辺地域を7つにわけ、後期更新世後半から現在までの自然環境の変化と人類の活動の影響を地理学、考古学、民俗学、文献史学などの研究者がそれぞれの立場からまとめている。「北海道とサハリンにおける最終氷期最盛期の植生」(五十嵐八枝子)、「最終氷期の環日本海地域における大型哺乳類動物相の変遷」(高橋啓一)、「旧石器時代の狩猟と動物資源」(佐藤宏之・山田哲・出穂雅実)などが後期更新世後期の環境変遷に興味がある人にとっておおいに参考になる。 (★★)

**7) 『環境史をとらえる技法』 シリーズ日本列島の三万五千年ー人と自然の環境史第6巻. 湯本貴和 [編] 高原光・村上哲明 [責任編集] 文一総合出版, 246p. (2011年4月) ¥4,000**

## 円+税.

上記シリーズの最終巻にあたる本書では、花粉分析、分子系統学、安定同位体分析などの手法を用い、最終氷期以降の植生変遷史、哺乳動物の分布変遷や人による動物資源利用の多様性などに関する研究例が紹介されている。全9章、4つのコラムから成る。完新世以降、歴史時代における研究例が多いが、後期更新世後期以降の環境変遷や古生態を復元する技法に興味がある人にとって参考になる本である。 (★★)

(間島信男)

## 事務局だより

### ■50周年記念事業の本が出版されました。(再掲)

50周年記念事業として編集を行っていた「化石から生命の謎を解くー恐竜から分子まで」が朝日新聞出版の朝日選書から4月末に発行されました。定価 1500 円。「同定から復元へ」「生活を復元する」「起源と進化を探る」「ミクロの世界」の4章から構成されており、化石から語る生命と地球の歴史、古生物学研究の最前線がわかりやすく書かれています。会員の方はもちろんのこと、周りの皆さまにも是非すすめてください。

### ■新入会員

- ・名取和香子 (喜多方市カイギュウランドたかさと)
- ・鈴木久仁博 (日本大学松戸歯学部生物学講座)

### ■2011年度会費の納入をお願いします

年会費 4000 円 (学生 2500 円)

郵便振替 00910-5-247262 「化石研究会」

\* 3年間会費未納の会員は、除籍となりますのでご注意ください。

編集・発行：化石研究会事務局 〒525 - 0001 滋賀県草津市下物町 1091

滋賀県立琵琶湖博物館地学研究室 TEL:077-568-4828, FAX:077-568-4850

e-mail: takahasi@lbm.go.jp (lbmはLBMの小文字)

ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/frsj/index.html>